Ⅱ．天皇や貴族の時代の熊野　（今から1500年～800年前）

この頃には国の形がほぼ整い、役人の制度や法律が出来ました。政治の中心は天皇や貴族で、都には各地からの税が運ばれ、奈良や京の都はたいへん栄えました。

土地と人民は天皇のもの（公地公民）とされ、人々には決まった広さの田畑が与えられることになっていましたが、しだいに貴族や寺社が所有する荘園が広がっていきました。

やがて、本宮・速玉・那智の熊野三山への信仰がおこり、皇族や貴族の熊野詣が盛んに行われるようになります。熊野古道は、まず和歌山県側（紀伊路）が開かれました。

熊野古道

熊野古道は、熊野三山（本宮・速玉・那智）にお参りするために開かれた道です。ルートはいくつかありましたが、代表的なルートとしては、紀伊半島を西回りする「紀伊路」と、東回りの「伊勢路」がありました。

紀伊路（和歌山県側の熊野古道）

今から1100年から800年ぐらい前の平安時代の中頃から終わりには、京都からたくさんの貴族たちが熊野三山をお参りしました。なかでも後白河天皇と後鳥羽天皇は、天皇をしりぞき、上皇となってから30回ぐらいお参りに来ました。当時、京都からは往復で１ヵ月もかかる道のりでした。

白河上皇…　９回	後白河上皇…３４回
鳥羽上皇…２１回	後鳥羽上皇…２８回

（紀伊路・伊勢路）三重県立熊野古道センター提供

京都―大坂―和歌山―田辺
- 本宮―速玉・那智（中辺路コース）
- 那智・速玉―本宮（大辺路コース）

伊勢路（三重県側の熊野古道）

400年ほど前の江戸時代からは、全国各地からたくさんの人たちが、伊勢神宮へのお参りした後、熊野三山へもお参りし、故郷へ帰るようになってきました。「蟻の熊野詣」と呼ばれるほどに、この伊勢路はたくさんの人の行列が続きました。

伊勢路は、参勤交代の道ではありませんでしたが、紀州藩の殿様（徳川氏）が領地を見回るための大切な道でもあったので、整えられました。熊野地方は雨が大変多く、大雨が降っても道がこわれないように、山道は大きくて平たい石を敷きつめて作られました。

松本峠、大吹峠、逢神坂峠、曽根次郎坂太郎坂などには、緑深く苔が生えた石畳が今も残っています。道幅は、殿様が領地を見回るときにのる駕籠が通るように考えられました。

伊勢―田丸―滝原宮―花の窟―┬ 速玉（浜街道コース）
└ 本宮（本宮道コース）

（熊野古道 松本峠 大泊側登り口）

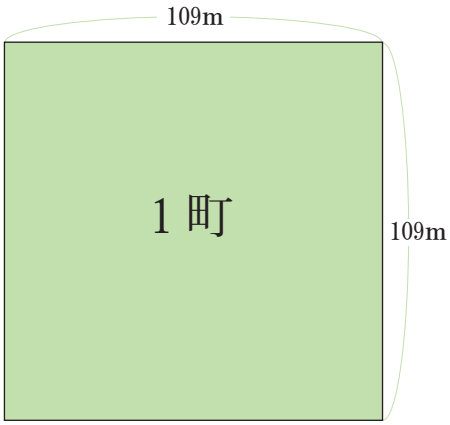
（松本峠のお地蔵さん）

大化の改新のなごり「条里制」あと

645年、都では中大兄皇子・中臣鎌足（後の藤原鎌足）が協力して蘇我氏を打ち倒し、天皇中心の新しい政府を立てました。これが「大化の改新」です。

新しい政府は、全国の土地と人々を天皇のものとし（公地公民）、ある年齢に達すると一定の広さの土地を貸し与えて、税を納めさせました。そのためには、田畑の広さを決まった大きさにしておく必要があります。そこで新政府は全国の土地を1町（109 m）を単位とする碁盤の目状に区割りすることにしました。（実際には、都から比較的近い地域で行われたようです。）

この区割りの方法を「条里制」とよびます。



（佃地区） 出典「国土地理院」（https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html）

有馬町の近畿大学工業高等専門学校跡地近くには「佃」という地名が古くから伝わっています。佃とは、「たづくる」（田を作る）という意味で、地名としては非常に古いものです。現在では一部住宅地になっていますが、ここに広がる田の形には特ちょうが見られます。ここには南北に一本の道が直線状に伸び、これと直角に交わる形で東西に何本もの「あぜ」がはしって、数多くの長方形の田を形作っています。「あぜ」一辺の長さは約 109 m と、その半分の約 54 m で、幅はいずれも約 10 m です。このような田のならびが古代から伝えられてきたものと考えられます。

下の写真は、有馬町佃付近の土地の様子を写したものです。これを見ると、今から 1300 年余り昔の「大化の改新」で定められた「条里制」の土地割りがここ熊野でも行われていたと思われます。

（佃地区を遠くに望む　有馬の風景）

おはなし

多娥丸（たがまる） と 笛吹橋（ふえふきばし）

熊野古道の松本峠の横道を400ｍも行くと、城跡があります。この城に住んでいた殿様（とのさま）が、今から500年ほど前の室町時代、この地方の有力者だった有馬忠親（ただちか）でした。この地は、城が築かれるまでは「鬼の岩屋」という地名でしたが、忠親が城を築いたことで「鬼ヶ城」という地名に変わりました。

多娥丸 退治のおはなし

平安時代、桓武（かんむ）天皇の頃のおはなしです。この鬼の岩屋（鬼ヶ城）には、身長約２ｍと大男の多娥丸が住んでいました。

「多娥丸は熊野の海を荒らし、近くに住む人々を苦しめている。」と、時の将軍 坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）に「海賊（かいぞく）多娥丸を征伐（せいばつ）せよ」との命令が出されました。

将軍田村麻呂らは熊野に来ましたが、多娥丸らを見つけることができません。ひときわ高い山に登り、観音様の名前を唱えていると、烏帽子（えぼし）をかぶった天人（てんにん）が現れました。そして、その天人は将軍田村麻呂に多娥丸の隠（かく）れ家（が）を告げました。

鬼の岩屋の岩は厳（いそ）しくそびえ、磯は波が激（はげ）しく、とても立ち寄れそうにありません。すると、鬼の岩屋近くの沖ノ島に一人の男の子が現れました。その子は、面白（おもしろ）おかしく歌を歌い手足をあげて舞うので、軍勢もそれにつられて踊り、沖ノ島は大騒（さわ）ぎとなりました。この騒ぎに鬼は油断してしまい岩屋の戸を開けてしまいます。その一瞬を見逃さなかった将軍田村麻呂は弓矢を放ち、多娥丸をしとめてしまいました。

童子が現れ、歌い踊った沖ノ島。地元の人たちは、「マブリカ」と呼んでいます。この沖ノ島は、「将軍田村麻呂が、魔王 多娥丸を見た島」ということなのでしょう「魔見ヶ島（まみるがしま）」の名が付いています。

笛吹橋

多娥丸を退治した後、木本町親地町にかかる橋を将軍田村麻呂ら一行は笛を吹いて渡りました。このことがあって以降、この橋は「笛吹橋」と呼ばれるようになりました。橋の欄干の７つの穴は、「横笛の７つの穴」をデザインしたものです。

（木本の入口に当たる所に笛吹橋）

この後の多娥丸

退治された多娥丸は、井戸の大馬の地に埋められました。809年（大同４）に社殿が造られ、大馬神社となりました。社殿の横に「田村社」を設け、多娥丸を退治した坂上田村麻呂も祀っています。

この後の坂上田村麻呂

多娥丸を退治した後も、将軍 田村麻呂は熊野の鬼を全て尾呂志の風伝峠まで追いつめ、四匹の鬼を生け捕りにしたと伝わっています。尾呂志には「四鬼」の地名が残っています。

（多娥丸が埋められている大馬神社　社殿に向かって右端に「田村社」）

おはなし

大馬神社の狛犬

（大馬神社）

大馬神社には、神社にあるべきものが、ありません。

それは、狛犬です。

では、その狛犬はどこにいったのでしょう。大馬神社では、七里御浜にどっしりと座る「獅子巌」を狛犬としています。

獅子巌は日本のスフィンクス

獅子巌は、海岸の突然隆起と海蝕現象によって今の形となり、あたかも熊野灘に向かってほえる獅子のように見えます。獅子巌近くに設置されている説明板には、「日本のスフィンクスとよばれている。」と書かれています。古代エジプトやメソポタミアでは、ライオン（獅子）は強さの象徴でした。獅子が神を守るという考えは、インド、中国にも伝わりました。いつしか２頭の獅子が神の前に配置されるという習慣もできました。高さ 25 m、周囲約 210 m もある巨岩 獅子巌を「日本のスフィンクス」と表現しても決して大げさではないのです。

口を開けた狛犬 と 口を閉じた狛犬

狛犬をよく見てみると、口を開けた狛犬と口を閉じた狛犬がいます。口を開けた狛犬を「阿像」といい、口を閉じた狛犬を「吽像」といいます。「阿」はすべての始まりを表し、「吽」はすべての終わりを表します。そこには平和な世界にたどり着くという意味が込められているのです。

獅子巌は口を開けた「阿の岩」、すぐ横に並ぶ神仙洞が口を閉じた「吽の岩」、二つ合わせて「阿吽の岩」といわれています。かつて井戸川がこの獅子巌の横を流れていました。江戸時代以前、この付近に道はなく、巡礼者は川と獅子巌前の浜を横切って歩きました。

（かつての井戸川の河口と獅子巌）

（正式な社殿を造築（ぞうちく） 1926 年（昭和 11 年）12 月 15 日） 井戸町硴屋（とさや）の地

（獅子巌 阿（あ）の岩） 明治中期

（井戸と有馬の境界） 獅子巌と神仙洞（しんせんどう）の間

（昔の羽市木の様子） 有馬町

（神仙洞 吽（うん）の岩）

おはなし

楊枝薬師堂 ～「おりゅう」と三十三間堂～

京都には、「楊枝のお加持」大法要と同じ日に行われる「通し矢」で有名な「三十三間堂」というお寺があります。正式名は、蓮華王院といい、その本堂は、南北にのびるお堂正面の柱の間が33もあることから「三十三間堂」と呼ばれています。地上16 m、奥行き22 m、南北120 mのたいへん大きなお堂です。

この「三十三間堂」は、紀和町の西にある小さな楊枝薬師堂とたいへん深い関わりがあるというお話が伝わっています。

今から800年以上も前に先の天皇の後白河法皇が度重なる頭痛のためにずいぶんと苦しみました。ある日、法皇は自ら、都のお堂におこもりになり、頭痛が治るようにと祈願なされました。すると、ある夜、金色の仏様が現れて、「私は薬師如来です。熊野川のほとりに高さ数十丈の大きな楊の木があります。この楊を切って、京の都に大きなお寺を建て、そして私の像を彫って祀れば、頭痛はすぐに治るでしょう。」と、法皇にお伝えになりました。

＊　ヤナギの違い

楊　→　ネコヤナギ、カワヤナギ　　柳　→　シダレヤナギ

（楊枝薬師堂）

法皇は大変お喜びになり、早速その大楊を伐らせましたが、あまりに長く大きいので、動かすこともできません。困り果てていたところ、不思議なことに、水中から天女が現れ出て、神力で軽々と京まで運ぶことが出来ました。この天女が、楊の精「おりゅう」です。

後白河法皇はその楊を棟木に使って1164年（長寛２年）に三十三間堂をお造りになられました。

すると、法皇の頭痛はすっかり治ったので、法皇は大喜びで、熊野楊枝の郷の楊の伐り跡にも大きなお寺が建てられました。そして、法皇が自ら刻んだ薬師如来を安置し、「頭痛山平癒寺」と名付けました。

楊枝薬師堂は、名前のとおり、頭の病気によく効くと広く知られ、三月の彼岸の入りには楊枝薬師まつりが行われ、多くの人が訪れます。

＊１　「楊枝のお加持」…頭痛封じと無病息災を願う伝統行事です。
＊２　「おりゅう」　　…いくつかのお話が残されています。
＊３　楊枝薬師堂の正面柱には「京都三十三間堂棟木之霊地」「頭痛山平癒寺霊場楊枝お柳薬師」と書かれています。

（多くの人でにぎわう楊枝薬師まつり）

おはなし

熊野市育生町の辺りは、東紀州の中心地である新宮から見て「北方の山間」にあることから「北山」と呼ばれていました。平地が少ないので、人々は山へ入って木を切ったり、炭を焼いたりして生活を立ててきました。山の仕事はたいへんきびしいものでしたが、働く人々は、雄大な峰々の景色に見とれたり、巨木や大岩、谷川の流れなどに空想をめぐらしたりして、仕事のつらさをなぐさめてきました。

市内に残る「民話」とよばれる話の多くはこうして生まれてきたものです。これらは、紙に書きとめられることはなく、人々が親から子へ、子から孫へと、いく百年にもわたって語り伝えてきたもので、私たちのふるさとの大切な財産です。「びき岩とたつ島」も、数多く残る民話の一つです。どうか、想像をたくましくして、味わいながら読んで下さい。

びき岩 と たつ島

（育生町にそびえる大絶壁「大丹倉」）

熊野市の北西部、育生町尾川から赤倉にかけての山々の頂には大きな岩のかたまりがいくつも見られます。それらはまるで、緑の海の中に浮かぶ島々のようでもあります。その中でも、とりわけ大きいのが「びき岩」と「たつ島」です。

びき岩はその名の通りカエルそっくりの形をした大岩で、尾川地区の南の山の上にどっしりすわりこんで、まわりの山々をにらみつけています。一方、たつ島は赤倉地区の山道のすぐ上にあり、大蛇が口をいっぱいに開いたような、これまた大きな岩で、見るからに不気味な姿をしています。

さて、ある日のこと、びき岩はついうっかり、たつ島の方に尻を向けてしまいました。昔のしきたりでは、人に尻を向けることはたいへん失礼なことでした。案の定、たつ島は真っ赤になって怒り出しました。

「おのれ、びき岩。竜であるおれ様に尻を向けるとは。一口に呑み込んでくれるわ。」

大きな口を開け、今にも飛びかからん勢いです。びき岩も負けてはいません。

「何をぬかすか。たつ島め。」

「何を、このやろう。」

さあ、大変です。びき岩とたつ島の争いが始まりました。山の木をなぎ倒し、岩をけり転がし、２匹は激しく戦います。

びき岩とたつ島の争いは三日三晩におよびました。おかげで、村中の田も畑も家も、もう何もかもがめちゃくちゃです。村人たちは途方にくれました。

「困ったのう、困ったのう。」

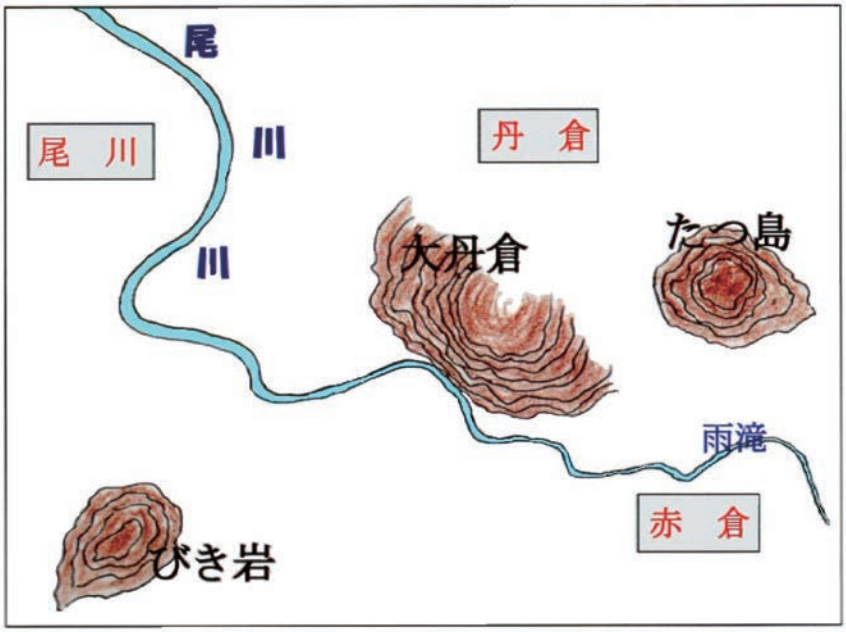
「わしらはいったい、どうすればいいんじゃ。」

と、突然ものすごい光がひらめき、耳もさけんばかりの雷の音がとどろき渡りました。２匹の怪物も、思わず後ずさりして天をあおぎました。

「びき岩もたつ島も、争いをやめよ。そんなにあばれては、村の者がめいわくだ。」

霧の中に現れたのは、びき岩やたつ島よりはるかに巨大な岩の絶壁でした。足もとの道路からの高さは300ｍもある育生町丹倉にそびえる「大丹倉」です。

あれほど勢いよくあばれていた２匹の怪物も、今はすっかりおとなしくなって、すごすごと山の奥へと引き上げていきました。そして、この先２匹が争うことは決してありませんでした。



（びき岩・たつ島・大丹倉）